

## 2. 研究の詳細

プロジェクト名	英語教育に関する CBI（内容重視の言語教育）に関する研究		
プロジェクト期間	平成 26 年 4 月～平成 27 年 3 月		
申請代表者 (所属講等)	宮迫靖静	共同研究者 (所属講等)	なし

### 目的

我が国の英語教育は変動期にある。現在、高等学校では、英語科目は英語で教えることになっており、2020 年の小学校での英語科授業実施に連動して、中学校においても英語による授業がはじまる。内容言語統合型学習（Content and Language Integrated Learning: CLIL）や内容重視型授業（Content-Based Instruction: CBI）が注目される中で、英語使用による「英語科教育法」科目が、大学において広まっている様子は余りない。従って、英語による英語教職科目が、学習者の科目内容理解、英語能力、動機づけ等に及ぼす影響に関する資料・根拠も殆どないため、この点に関する調査が必要である。

このプロジェクトの目的は、CBI による「英語科教育法」の授業を行い、学習者の CBI に関する認識を調査し、学習者の科目内容理解、英語能力、動機づけ等との関係、及びこれらの要因が CBI に関する認識に及ぼす影響を調査することであった。

### 内容

このプロジェクトには上記の目的があるが、CBI による「英語科教育法」の授業実施自体に、次のような意義がある。

まず、将来中・高等学校等において英語を教える教員が、英語による内容科目の授業を体験しないのは不自然である。また、英語母語話者である教員による英語による授業はあるかもしれないが、日本人教員による CBI は余りない。日本人教員の場合、学生の英語学習状況や弱点が把握しやすく、専門科目の難易度に応じた修正がし易いため、内容理解に関する CBI への不安に対処しやすい。さらに、日本人教員による英語授業は、将来の英語教師である学生のモデルにもなり得る。

このような CBI は、英語力向上を目指す学生の動機づけ向上を期待させ、英語科教員養成の目標に叶うと同時に、グローバル人材の育成にも寄与すると考えられる。尚、「英語科教育」専門科目に関する CBI の主たる目的は、(a) 英語教育に関する基本的知識の学習、(b) 英語への接触とその使用による英語能力の向上、である。

### 方法

このプロジェクトで実施した英語教育に関する CBI は表 1 のとおりである。また、調査・分析に関しては表 2 のとおりである。

### 実施体制

このプロジェクトは、単独で学内で実施した。

表 1. 英語教育に関する CBI

時 期：2014 年度前期（2013 年度後期から試行し，2014 年後期も継続）  
参加者：本学学生 70 名（中学校英語専攻・小学校英語専修を中心とする 2～4 年生）  
科 目：英語教育概論（後期：英語科教育研究 A）（何れも中・高等学校教員免許取得必修科目）  
形 態：講義と演習（2：1）  
教科書：*How to Teach English* (new ed.) (Harmer, 2007) [後期：*How Language are Learned* (third ed.) (Lightbown et al., 2013) ]

表 2. 調査・分析

調 査：質問紙法（6 段階リカート法 81 項目）により，CBI に関する認識及び英語学習に関する動機づけを調査  
分 析：主因子分析，分散分析，回帰分析により，CBI に対する認識に関する因子を抽出し，CBI に対する認識と内容理解・英語能力・職業志望の関係を探る。  
尚，内容理解は授業成績で，英語能力は自己申告による英検レベルで，測定した。

## 成果

### ① CBI に対する評価

このプロジェクトの一環として実施した平成 24 年度試行 CBI に関する分析（宮迫，審査中）では，CBI による授業を受けた学生が認識した CBI の長所は，科目内容理解に効果的であり，やりがいがあり，英語使用が多いという点である。短所は，教師・学生間及び学生間のやりとりが十分でない点であった。また，英語に関する指導を必要とする声は殆どなかった。これは，授業者としての CBI の授業に対する認識と一致し，手応えを裏付けるものである。従って，CBI による英語科教育法の授業の試みに対する学生の評価としては，及第点であると判断でき，今後 CBI の継続を後押しするものである。尚，本調査に関する分析は現在実施中である。

### ② CBI の認識に関する因子

CBI の認識に係る 39 の質問項目を対象に，CBI による英語科教育法の授業に対する参加者の認識に関する因子があるか，探究的分析（最尤法，プロマックス回転，因子負荷量  $\geq |.50|$ ，因子項目数=3）を行い，3 因子を抽出した。因子 I は，CBI による授業に対する認識に関する効果的因子 ( $\alpha = .85$ )，因子 II は，CBI による授業に対する認識に関する好意的因子 ( $\alpha = .81$ )，因子 III は，CBI による授業に対する認識に関する英語使用因子 ( $\alpha = .72$ ) と名付けた。

### ③ CBI の認識への影響

まず，内容理解の上・下位群が CBI に及ぼす影響を分析し，内容理解の高い参加者の方が，CBI の授業において効果や英語使用を認め，好意的であることが示された。次に，英語能力の上・下位群が CBI に及ぼす影響では，英語能力が高い参加者の方が，CBI の授業に好印象をもったが，CBI の授業における効果や英語使用に関する認識には，違いはなかった。進路希望に関しては，英語教員志望・非英語教員志望群を比較したが，英語教員志望か否かは，CBI の授業に関する 3 因子への影響は見られなかった。

#### ④ 英語学習の動機付けとの関係

Miyasako (under review)では、残りの 42 の質問項目を対象に、(a) 参加者の英語学習に対する動機付け、(b) CBI に関する認識と英語学習に対する動機付けの関係、(c) 内容理解・英語能力が英語学習に対する動機付けに及ぼす影響を、調査した。その結果、英語学習に対する動機付けは「理想自己 (ideal L2 self)」・「英語学習に対する態度 (attitudes to learning English)」が中心となり、CBI に関する認識の 30% の分散を説明することが示された。また、英語能力・内容理解と関係がある英語学習に対する動機付けに関しては、肯定的な「理想自己」・「接近的用具性 (promotion-focused instrumentality)」と否定的な義務自己 (ought-to L2 self) ・回避的用具性 (prevention-focused instrumentality) と関係があることが示された。

#### 平成 26 年度実施による研究成果

現在、調査に基づき分析を実施中である。平成 25 年度分の成果を確認できる成果が期待される。この分析に基づいて、より発展的な分析に繋げる予定である。

#### 今後の予想される成果

CBI による英語科教育科目を継続・拡充する。また、CBI の本来の目的の一つである学習者の自律性 (autonomy) の確立に繋がる CBI へと質的な改善に繋がっていく可能性がある。

#### 展望

一般教育における CLIL から専門教育における CBI への繋がりによって、英語教員志望学生が英語・内容学習を高め、英語教員への動機付けが高まることが期待される。

#### 学会発表・論文

Miyasako, N. (2014). University students' perceptions of Content-Based Instruction on English language teaching and their relevance to the students' L2 motivational self systems: An exploratory study. Paper presented at The JACET 53rd (2014) International Convention, in Hiroshima.

Miyasako, N. (under review). University students' perceptions of content-based instruction on English language teaching and their relevance to the students' L2 motivational self system: An exploratory study. *JACET Journal*, 60.

宮迫靖静 (2014) 「大学における英語科教育に関する内容言語統合型学習に対する認識」 口頭発表. 2014 年度 LET 関西支部春季研究大会. ノートルダム清心女子大学.

宮迫靖静 (審査中) 大学における英語科教育法に関する内容重視型言語教育に対する認識. 『日本教科学会誌』 第 38 巻.

○本報告書は、本学ホームページを通じて学内外に公開いたします。

○本経費により作成された成果物や資料等については、必ず全て添付願います。